松浦市文化財調査報告書 第７集

田原積石塚・寺ノ尾C遺跡

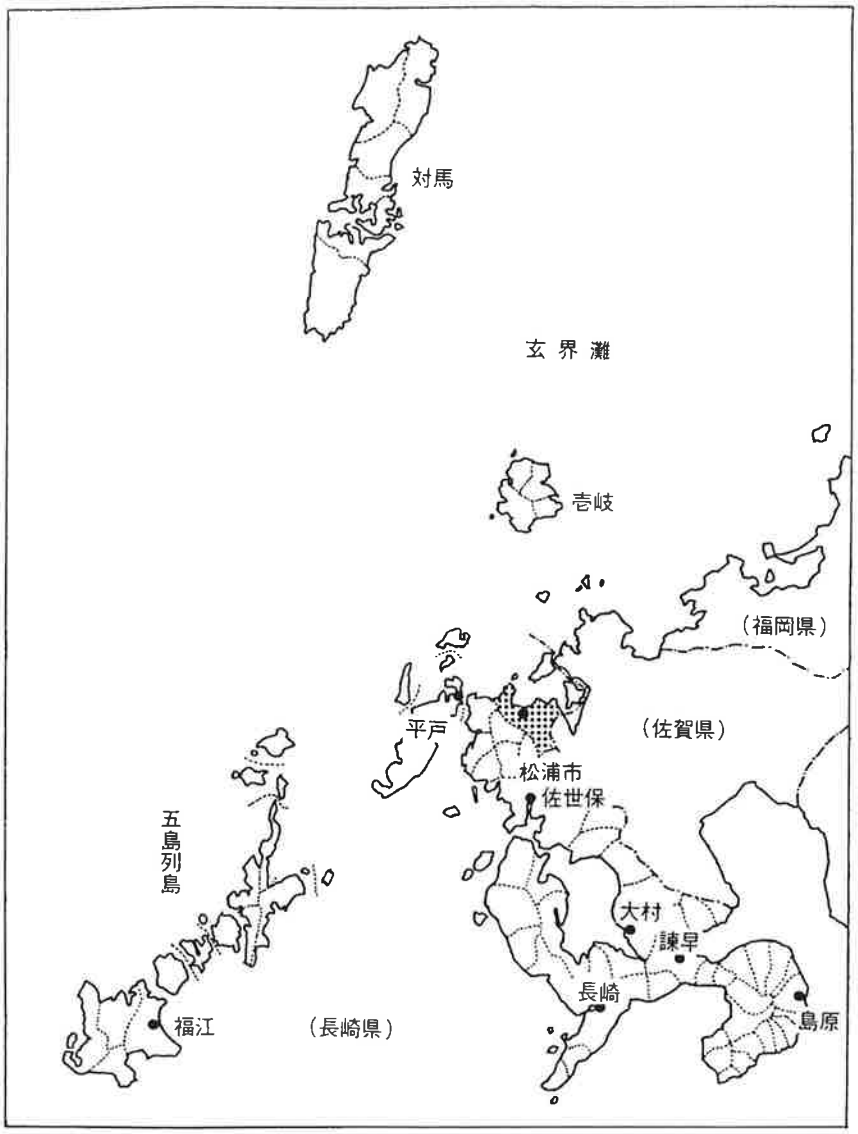
竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う
遺 跡 範 囲 確 認 調 査 の 報 告

1990

長　崎　県
松浦市教育委員会

松浦市文化財調査報告書 第７集

田原積石塚・寺ノ尾C遺跡



長崎県松浦市教育委員会

発刊にあたって

松浦市は、日本列島の西端に位置し、中国大陸・朝鮮半島とも近いという地理的条件もあり、古くから大陸との交流をうかがわせる遺跡も数多く知られています。

近年、本市においても各地で各種の開発事業が相継いで行われるにあたり、埋蔵文化財の保存が問題となっております。そこで教育委員会では、市内に埋蔵された数多くの文化遺産の保護を行うとともに、その保存に努力しております。

今回は、竜尾川地区県営圃場整備に伴って、田原積石塚・寺ノ尾C遺跡の範囲確認調査として実施したものです。その結果、田原積石塚は弥生時代から古墳時代にかけて、寺ノ尾C遺跡は旧石器時代から弥生時代にかけての遺物包含層が確認されました。

今回の報告書は範囲確認調査の概要をまとめたものであり、決して満足のできるものではございませんが、学術研究に少しでも寄与でき、市民の皆様が埋蔵文化財に対する理解と認識を深め、さらに文化財保護の一助になれば幸いと存じます。

今回の調査に際しましては、関係者のご理解と、多くの方々のご参加を得て実施することができました。特にご協力をいただいた土地所有者の方々には種々の点でお世話になりました。心より深く感謝申し上げます。また、文化庁・長崎県教育委員会はじめ多くの人たちのご指導、ご協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成２年３月

松浦市教育委員会
教育長　呼　子　俊　一

例　　言

1. 本書は、平成元年度に実施した竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う「田原積石塚」「寺ノ尾C遺跡」の埋蔵文化財範囲確認調査報告書である。
2. 調査は、国庫および県費補助を受けて松浦市教育委員会が実施した。
3. 調査にあたっては、県文化課・松浦市農林課の協力を受けた。
4. 調査は、松浦市教育委員会社会教育課が実施し、社会教育主事の中田敦之があたった。
5. 本書の執筆・編集は中田があたり、長由美、江口鈴子、久家洋子、山下彰子の各氏が参加協力した。
6. 調査によって出土した遺物は、松浦市教育委員会がその保管の任にあたっている。
7. 本書は、松浦市文化財調査報告書第7集にあたる。

本　文　目　次

Ⅰ　は　じ　め　に …… 1
　1. 調査に至る経過 …… 1
　2. 調査関係者 …… 1
Ⅱ　田原積石塚・寺ノ尾C遺跡の調査 …… 2
　1. 立地と環境 …… 2
　2. 田原積石塚調査の経過 …… 4
　3. 田原積石塚の遺構 …… 4
　4. 田原積石塚の土層および出土遺物 …… 7
　5. 小　　結 …… 12
　6. 寺ノ尾C遺跡調査の経過 …… 12
　7. 寺ノ尾C遺跡の土層および出土遺物 …… 14
　8. 小　　結 …… 18
Ⅲ　ま　と　め …… 19

Ⅰ はじめに

1．調査に至る経過

長崎県においては、昭和58年度に10カ年間の第三次土地改良長期計画を策定し、県内各地で農業基盤整備事業を推進している。

松浦市においても県営圃場整備事業として御厨町竜尾川地区が昭和61年に計画された。それに伴い文化財について長崎県北振興局・市農林課と協議を重ねた。計画地区内には長崎県遺跡地図52―47寺ノ尾Ｃ遺跡と52―45田川遺跡が周知されていた。また、分布調査の結果新たに田原免にて積石塚らしきものを２基確認したので、埋蔵文化財の保護と開発の調整を図るため、県文化課・県北振興局・市農林課・市教育委員会との協議を行った。その結果、遺跡の規模・範囲を把握し、協議に必要な資料を得るために範囲確認調査を実施することになった。昭和63年に文化庁の補助金を申請し、平成元年度に文化庁の補助金交付が承認されたので平成元年11月～12月に調査を実施した。

2．調査関係者　（敬称略）

調査主体	松浦市教育委員会	
調査総括	教育長	呼子俊一
	教育次長	松尾公平
事務局	社会教育課課長	石本利明
	社会教育課次長	網本利光
	社会教育主事	中田敦之
調査担当		中田敦之
調査協力者	松浦市農林課、土地所有者、田原積石塚……辻増雄、吉野正治、前田正訓、北浦亀良、松本幸、前田壽一、西田利堅、末武長重、山下克己、松永精一 寺ノ尾Ｃ遺跡……久原初男、松本健嗣	
調査外業者	前田公彦、中川サエ子、中山ひろ子、小浦良子、谷口ハツエ、村田政子、山口サエ、辻元エン、天久保正子、松永セツコ、堂領京子、立石とよ子、岩崎啓子、松本フサエ、久原ツギ、岩崎アイ子	
調査内業者	長由美、江口鈴子、久家洋子、山下彰子 西井由美　（社会教育課）	

今回の田原積石塚・寺ノ尾Ｃ遺跡範囲確認調査においては、土地所有者の方々を初め、多くの方々のご協力により、スムーズに進行することができました。記して感謝を表したい。

Ⅱ　田原積石塚・寺ノ尾C遺跡の調査

1．立地と環境（第１図・第２図）

田原積石塚は、市の中心地から西方約６kmの松浦市御厨町田原免字田原、寺ノ尾Ｃ遺跡は西方約４kmの御厨町上登木免字大野谷ほかに所在している。

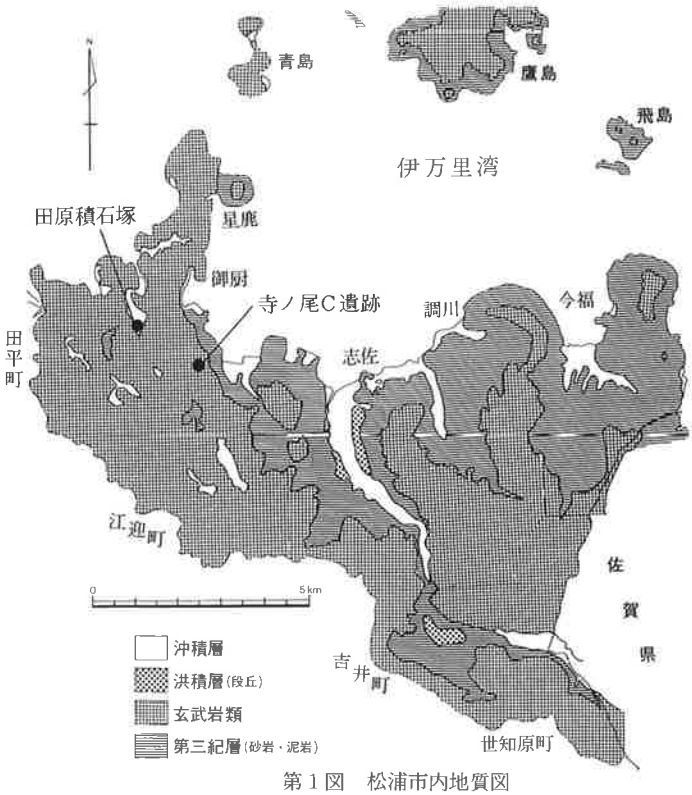
長崎県本土の北端に位置する松浦市は、北松浦半島の北端部とその沖に浮かぶいくつかの島々から構成されている。北に伊万里湾・玄界灘、西から南にかけては北松浦郡の田平・江迎・吉井・世知原町と、東は佐賀県伊万里市と接している。市の面積は95.34㎢である。

市内の地質は第三紀層を基盤とし、その上に玄武岩が広く堆積している。この玄武岩は、北松浦半島を中心に西北九州に広く分布する松浦玄武岩と称されるもので、典型的な溶岩台地や平頂性の独立丘をなしているが、かつては伊万里市南方を中心として噴出した火山であったという。従って、佐賀県境を占拠する標高777m の国見山を主峰とし、北および西に高度を減じている。津崎鼻や波津崎の海食崖には、玄武岩の柱状節理が発達している。

遺跡の立地する市の西部地区は、玄武岩が不整合に覆っていたる所に玄武岩台地を形成している。この台地は、竜尾川・加椎川・坂瀬川の浅い谷に刻まれた低位台地となっている。中央部を流れる竜尾川は、吉井・江迎町境の白岳山麓に源を発し、木場川・田代川などの支流を集めて、低位台地を刻んで北へ流れている。河口には三角洲がほとんどつくられずラッパ状に開いた三角江となっている。

田原積石塚は、この竜尾川下流域左岸の沖積台地から丘陵端にかけて立地している。標高は約10m ～13m あり、右岸には見事な棚田が展開している。

一方、寺ノ尾Ｃ遺跡は田原積石塚より東方1.7kmの市道中野・寺ノ尾線と横久保・白岳線が交差する地点から北西へ約200m の地点、標高約68m～72m の棚田の水田地帯に存在している。



第１図　松浦市内地質図

周辺は市内でも各時代の史跡等の多い地域として注目されており、以下各時代ごとに重要遺跡をあげる。

星鹿半島一帯は、旧石器時代から道具生産の主たる石材である黒曜石の原産地が点在し、特に牟田地区は全国的にもよく知られている。そのためか半島全域が遺跡といっていいほど分布している。旧石器時代の所産であるナイフ形石器や台形石器が牟田C・中ノ崎・長蔵坊遺跡などで確認されている。また、寺ノ尾A・B・C遺跡からも、ナイフ形石器・台形石器・細石核が採集されている。姫神社遺跡は、昭和41年に日米合同調査が行われ縄文前期～中期にかけての土器・石器等が出土した生活遺跡である。池田遺跡は、昭和63年・平成元年度に遺跡の範囲確認調査が行われ、縄文後期～弥生中期にかけての遺跡で、箱式石棺墓、甕棺墓、貝塚などが検出されている。また、中世の生活遺跡でもある。小嶋遺跡群は、7世紀後半代の横穴式石室を主体とする円墳と思われ、3基所在している。いずれも封土と天井部を欠いており、調査した1号墳石室から銀環・碧玉製勾玉・鉄器・ガラス玉・須恵器が出土している。古墳時代以降では、「宇野御厨」の痕跡であろう。宇野御厨荘、単に御厨荘ともいわれている。律令制下では、天皇や神に貢納する魚貝・果物を贄と称し、のちに宇野御厨が置かれた松浦・五島の地域でも、大宰府を通じて贄が貢上されていたことが『延喜式』や贄木簡等によって知られる。当時の御厨の範囲を確定することは難しいが、鎌倉期の史料から考えると、現在の五島列島と県北部の島々を含む県北地域と伊万里湾西側地域を含む一帯であろうと思われる。平安末以降では、源久を始祖とする松浦党の諸氏の中で、御厨を姓としている人物に「御厨並、三河守守、源宥」等の当地を本拠とする土豪名が見える。室町期に入ると、御厨氏は盛んに朝鮮貿易を行っている。『李朝実録』に「下松浦三栗屋太守源満」「下松浦三河守融」等の名が見える。この御厨氏が居城していた所が御厨城である。

1. 姫神社遺跡
2. 北久保C遺跡
3. 北久保A遺跡
4. 北久保B遺跡
5. 貴船神社古墳
6. 牟田C遺跡
7. 北久保経塚
8. 牟田池上遺跡
9. 牟田A遺跡
10. 佐世保崎遺跡
11. 戸ノ本崎遺跡
12. 中ノ崎遺跡
13. 長蔵坊遺跡
14. 池田遺跡
15. 坂本遺跡
16. 御厨城跡
17. 水尻A遺跡
18. 水尻B遺跡
19. 小嶋古墳群
20. 小嶋遺跡
21. 田原積石塚
22. 城ノ越城跡
23. 葉山六地蔵塔
24. 田川遺跡
25. 寺ノ尾A遺跡
26. 寺ノ尾B遺跡
27. 寺ノ尾C遺跡
28. 横久保遺跡

第2図田原積石塚・寺ノ尾C遺跡周辺遺跡分布図 $\left(\frac{1}{50,000}\right)$

２．田原積石塚調査の経過（第３図・第４図）

今回の田原積石塚の範囲確認調査は、市教育委員会と土地所有者（10名）と調査日程等について協議し、承諾を得られたので、稲の収穫が終了した平成元年11月７日～12月５日までのべ29日間行った。その間、積石塚とは別に２つの地点において弥生時代～古墳時代にかけての良好な遺物包含層を確認することができた。

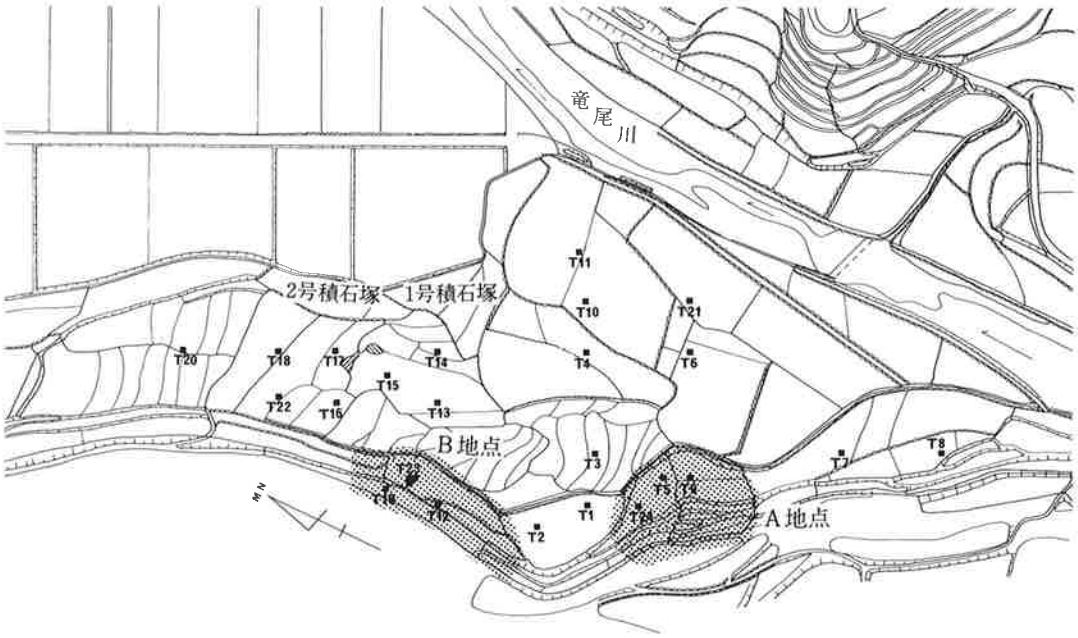
調査は、積石塚周辺を20m ×20m のメッシュに設定して行った。更に、20m ×20m の調査区中に２m ×２m のトレンチ24箇所（Ｔ23は12㎡）を、積石塚では１号積石塚104㎡、２号積石塚92㎡の26箇所を設定し、発掘調査を行った。調査面積は115.6㎡であった。

Ｔ16・Ｔ20を除くすべての調査区から遺物が出土したが、明確な包含層からの出土が少なかった。しかし、狭い範囲ではあるがＴ23区を中心とする地点からは弥生中期～後期にかけての遺物を、Ｔ５区を中心とする地点からは弥生後期～古墳時代にかけての遺物の包含層が確認されている。一方、積石塚の調査においては、積石の組み方に規則性が認められず、内部にも遺構の検出はできなかった。

３．田原積石塚の遺構（第５図～第７図）

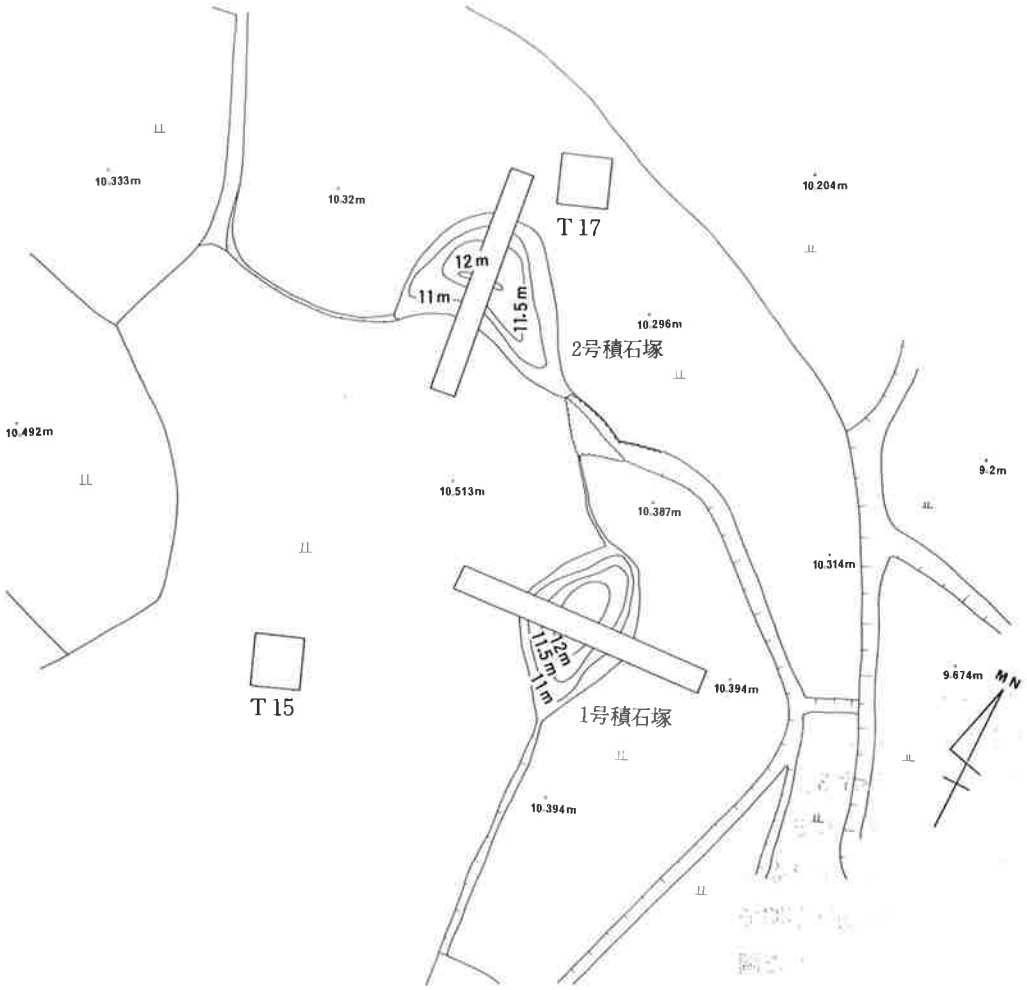
１号積石塚・２号積石塚

今回の調査の最重点であったこの２基の積石塚は、分布調査において発見したが、雑草等のため２m ぐらい盛り上がったマウンドに積石らしきものを確認したにとどまり、その性格の確認はできていなかった。地主の末永長重、山川克己氏によると、石塚といってお墓の跡である



第３図　田原積石塚調査区設定図（$\frac{1}{3,000}$）

こと。また、周辺にお堂があった。と言い伝えが残っているとのことであった。調査はまずこの２基の積石塚全体の草刈り作業から行い、調査区を設定し、確認作業を行った。その結果、石の組み方に規則性が認められず、内部に遺構もないため、古墳時代の積石塚とは考えられないことが明確となった。２基とも積石の内部には拳大から人頭大の礫のほか、弥生土器片、磁器片・陶器片等が捨てられており江戸末期のものであった。１号積石塚では礫を取り除くと灰褐色腐蝕土、褐黄色粘質、淡黄褐色混礫層とつづき、ほぼ水田面と同じレベルになると、濁黄褐色礫層となる。２号積石塚も礫を取り除くと、灰褐色腐蝕土、淡黄褐色混礫層とつづき、水田面と同じレベルになると、濁黄褐色粘土層となり、その下に地山の濁黄褐色礫層へとつづいている。いずれも水田の開墾後に積石が築かれたことが確認できた。積石塚周辺は他の調査区とくらべて浅いところに地山層および玄武岩風化土層が存在するため本来一帯がやや高くなっていたものと思われる。そこに水田を開墾する際、出土した礫などを捨てたのであろう。また、

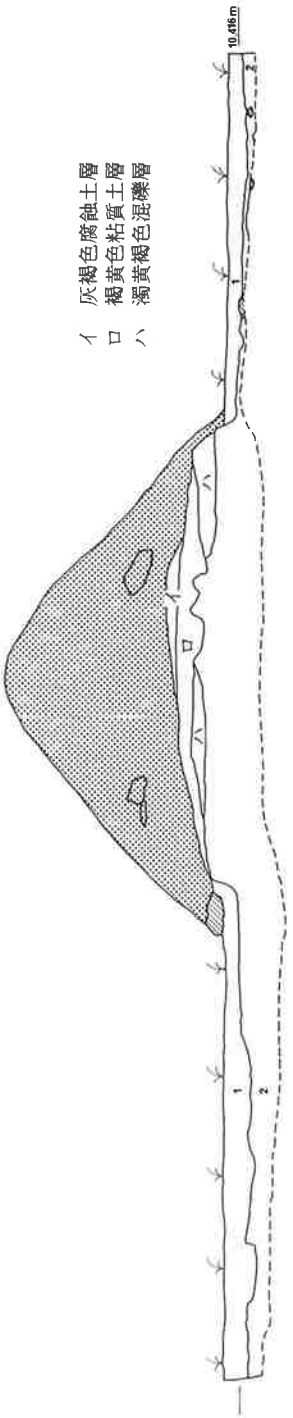


第４図　積石塚周辺地形図（$\frac{1}{300}$）

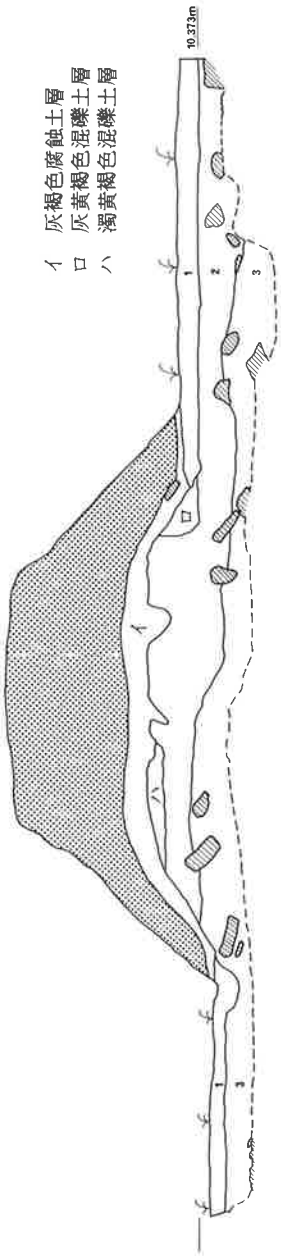
明治16年に竜尾川が氾濫していることが伝承されており、それ以前から積石塚が存在していたとのことである。明治16年以前の竜尾川の氾濫による礫を片付け、積み上げたものとも考えられる。出土遺物では、１号積石塚の２層内より黒曜石製剝片１点・弥生土器片４点があった。また、２号積石内からは拳大の腰岳産黒曜石石核１点があった。

柱　穴

Ｔ５・９・23・24区において、ピットを検出した。Ｔ５区では２層の灰黒褐色粘質土下部から３層に掘り込んだピット１基（覆土は淡茶褐色粘質土）を検出したが遺物はなかった。この３層には弥生土器・土師器・須恵器が包含されているため、これらの時期に相当すると思われる。Ｔ９区でも２層下部から３層に掘り込んだピット１基（覆土は茶褐色粘質土）を検出し、中より弥生土器片３点が出土している。さらに５層の茶褐色粘質土内にも２基検出できたが、時期は不明である。Ｔ23区は拡張した調査区で６層の黒褐色粘質土

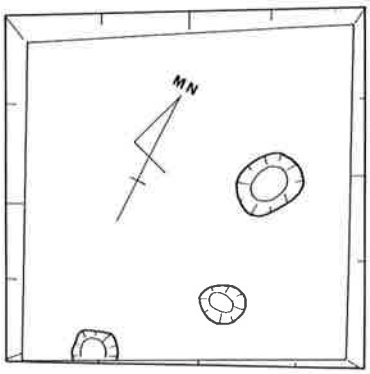


第５図　１号積石塚南壁断面図（$\frac{1}{30}$）



第６図　２号積石塚東壁断面図（$\frac{1}{30}$）

から７層の褐色粘質土へ掘り込んだピットおよび落ち込みを検出した。また、６層中に焼土塊が多数検出されたため住居跡に伴うピットの可能性もある。時期的には包含層の遺物から弥生中期～弥生後期の時期と思われる。Ｔ24区においても５層～７層中にピットが多数検出されたが時期は不明である。

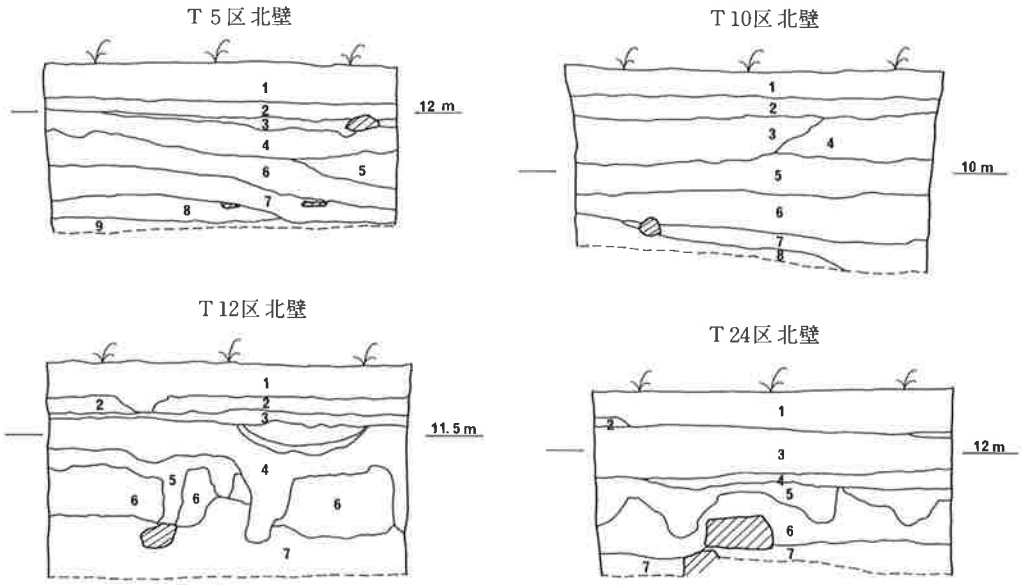


第７図　Ｔ９区柱穴平面図（$\frac{1}{40}$）

４．田原積石塚の土層および出土遺物

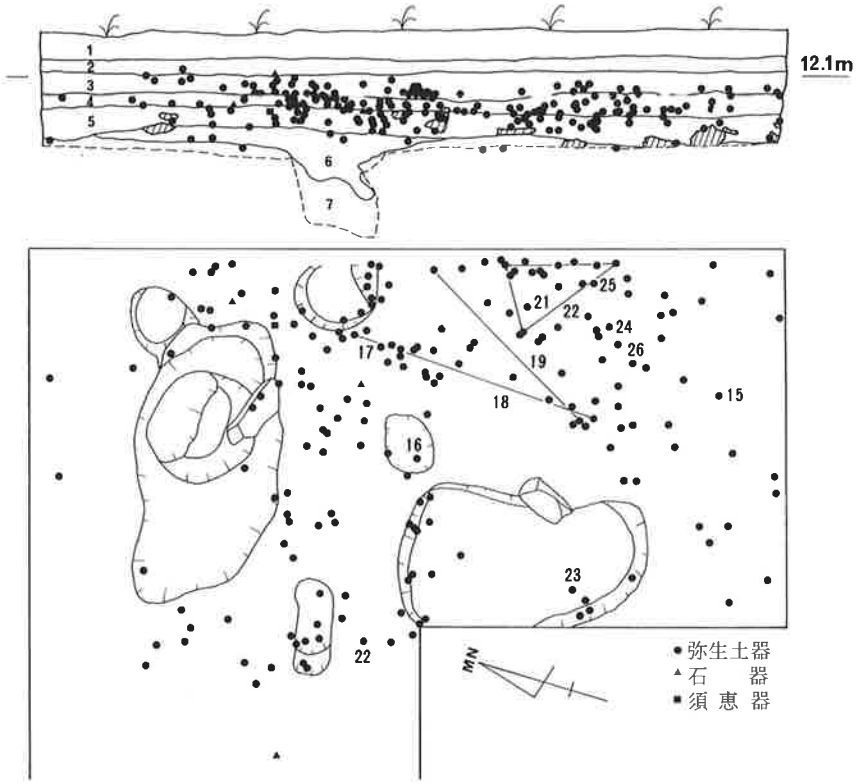
土層（第８図・第９図）

調査区24箇所のうち西側のＴ５・９・24の畑地（Ａ地点）とＴ12・19・23の水田および畑地（Ｂ地点）、また、西側の積石塚から北側のＴ17・18・20の調査区、東側のＴ10・11調査区を除くすべての調査区から、１枚～３枚の礫層とその下部に黄白色又は灰（白）色の粘土層を確認することができた。これらは竜尾川の氾濫に無関係とは考えられないため、数回の氾濫で礫が堆積したものと思われる。それと同時に遺物も流れ込んだものと考えられる。しかし、現在までのところ竜尾川上流域周辺では遺跡が確認されていない。ここでは柱穴の項で若干触れたがＡ地点のＴ５・Ｔ24とＢ地点のＴ12・Ｔ23の土層について概略説明を行う。Ｔ５の調査区は１層表土、２層は黒色および黄色の斑点を含んでいる灰黒褐色粘質土で固くしまっている。３層は暗褐色粘質土、４層は黒い斑点を含む茶褐色粘質土で、３・４層は遺物包含層である。５層は軟らかい明茶褐色土、６層・７層は区別がつきにくいが６層がやや明るい黄茶褐色粘質土で、７層がやや黄味をお帯びている。８層は玄武岩風



第８図　土層図（$\frac{1}{40}$）

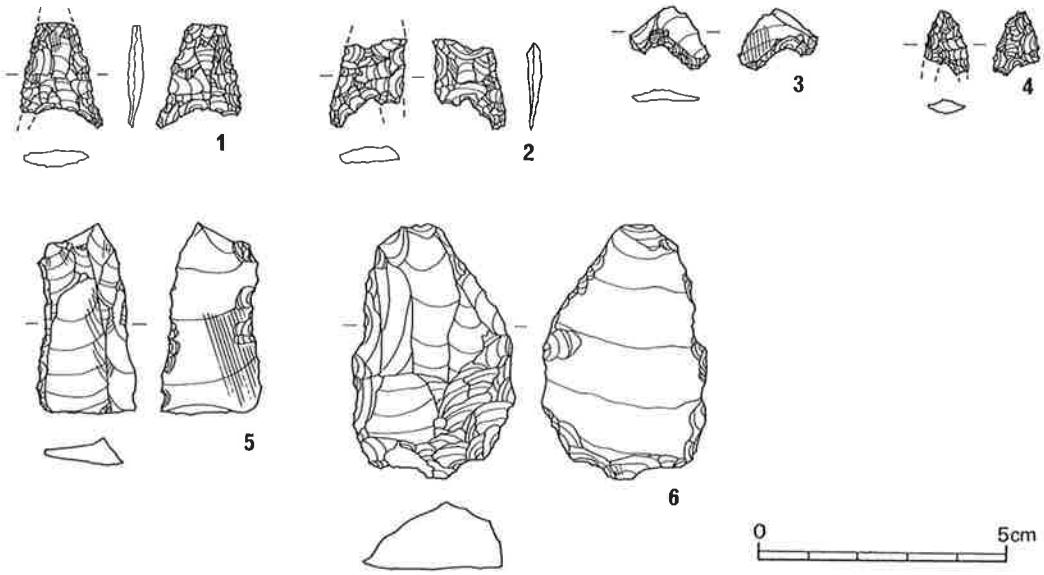
化礫を含む層で、９層も同じく玄武岩の風化した土層で濁黄橙色混礫層（地山）である。T24の調査区は１層表土、２層は濁黄灰色粘質土、３層は最下部にカチカチにしまった黒い班点を含む灰褐色粘質土である。４層は黒灰褐色土、５層は暗黒灰褐色土、６層は茶褐色の班点を全体に含んでいる淡褐色粘質土で、７層は褐色粘質土である。Ｔ５・T24は接近している調査区でありながら堆積する土層に相違が認められる。T12の調査区は１層表土、２層は黒い班点を含む灰黄褐色粘質土、３層も黒班を含む濁黄褐色粘質土、４層は黒褐色粘質土で一部ピット状の落ち込みがある。２～４層は固くしまっている。４層上部に落ち込みが認められる。茶褐色粘質土の下に楕円形状に褐色粘質土がある。５層は濁茶色の班点がある茶褐色粘質土、６層は小さな砂岩を含み濁茶色の班点がある灰茶褐色粘質土、７層も６層と同じ班点と砂岩を含み濁黄褐色粘質土層である。複雑な土層堆積状況を呈す。遺物は２層より弥生土器など７点が出土している。T23の水田の調査区では１層の表土の下に黄褐色の床土が２層と３層にある。４層は灰褐色粘質土で、５層・６層が黒褐色粘質土である。６層は５層より柔らかくしまりがない。また、粘性が強くやや灰色を呈している。７層は褐色粘質土である。遺物は弥生中期～古式土師器の土器片が２層～６層まで認められた。これらの状況からＡ・Ｂ両地点においては圃場整備計画の修正が求められるようだ。



第９図　T 23区遺物分布図（$\frac{1}{40}$）

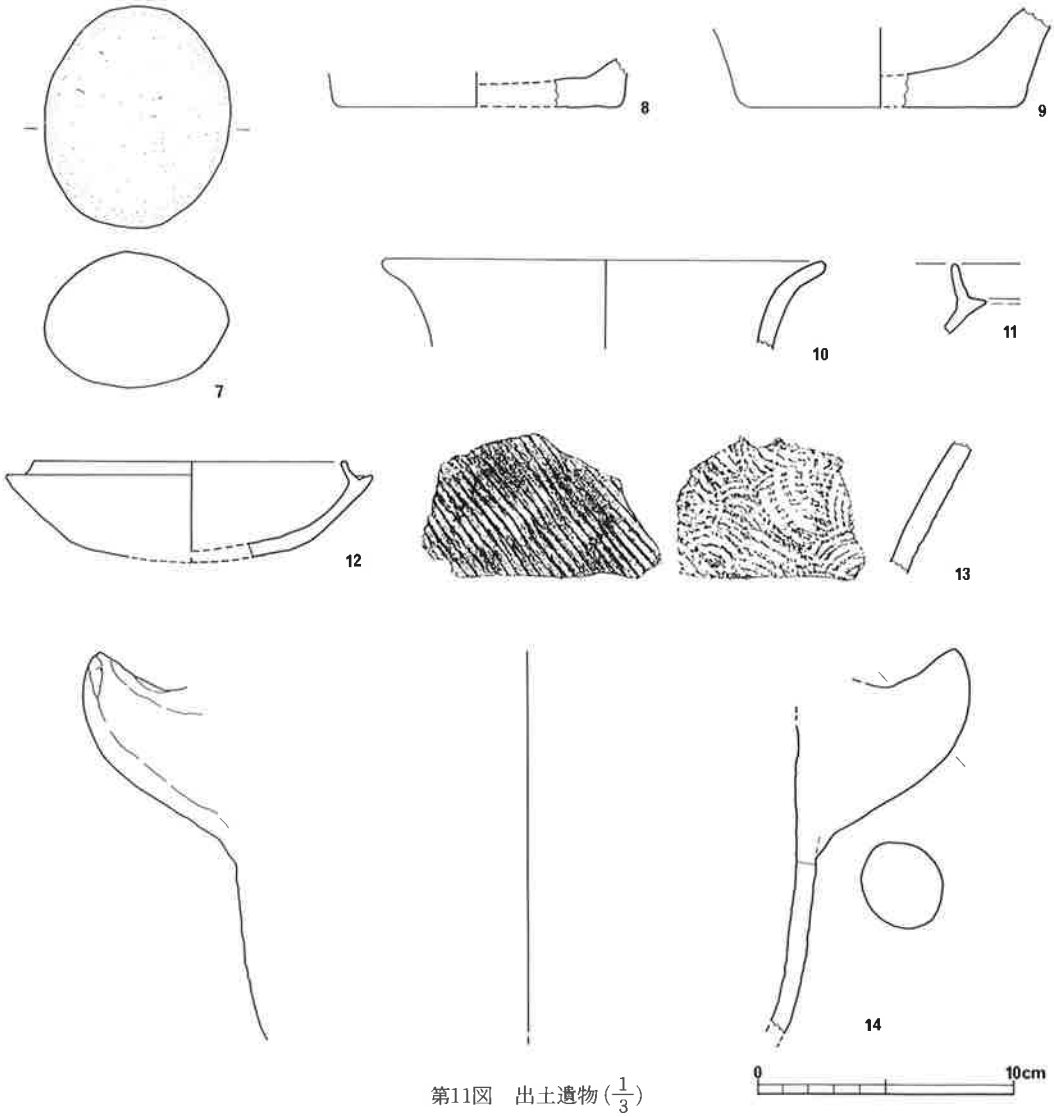
出土遺物（第10図～第12図）

調査区全体から出土した遺物は736点であった。そのうち実測可能な27点を図示した。**1**～**7**は石器で**7**を除くすべてが黒色黒曜石製である。**1**～**4**は石鏃で、完形品はなく先端部および脚部を一部欠損している資料である。**1**は側縁の形が直線的で脚部が尖っている。**2**は抉りがやや深い。**3**は剝片鏃である。**4**は小型の石鏃で側縁が曲線を描いている。**1**はT1-2層出土。**2**はT14-2層出土。**3**はT５-3層出土。**4**はT３表土出土である。**5**はT19-4層出土の使用痕のある剝片である。**6**は１号積石塚の積石下層の褐色粘質土層から出土した剝片で、全体にローリングを受けており風化も著しい。縞文様が顕著である。**7**は１号積石塚調査区表土出土で安山岩系の磨石である。**8**～**14**は土器である。**8**は雲母・石英・長石を多量に含む胎土で、縄文晩期の底部片と思われる。全体に磨滅している。T13-2層出土。**9**はT24-2層出土の弥生土器底部片である。外面褐色、内面茶褐色を呈し平底で、胎土に金雲母・石英を含む。**10**は甕形土器の外反する口縁部片で、内面は茶褐色を呈し煤が付着している。口径17cmを測る。T５-3層出土である。**11**～**13**は須恵器で、**11**・**12**が坏身・**13**が甕胴部片である。Ⅲ期に属するもので６世紀後半でも古い所産である。**11**はたちあがり高1.6cmを測る。**12**は$\frac{1}{4}$の破片で復元した資料で口唇部径12cm、たちあがり高１cm、受部内径13.4cmで、器高約４cmで６世紀後半代の所産である。T５-3層出土。**13**は外面縦方向の平行タタキ、内面は同心円の板具を用いてかさねの叩きを行い青海波文となっている。**14**は土師器甑か甕の把手部分である。やや小ぶりで角状の先端は若干折り曲げられ、断面は楕円形を呈している。ナデ仕上げで稜は明瞭でない。黄褐色を呈し、焼成はやや甘い。１～２mmの石英粒を含む。T５-3層出土。**15**～**27**はT23区出土の土器を図示した。この調査区では273点の遺物が出土しているが破片が多い。大部分が土器で、

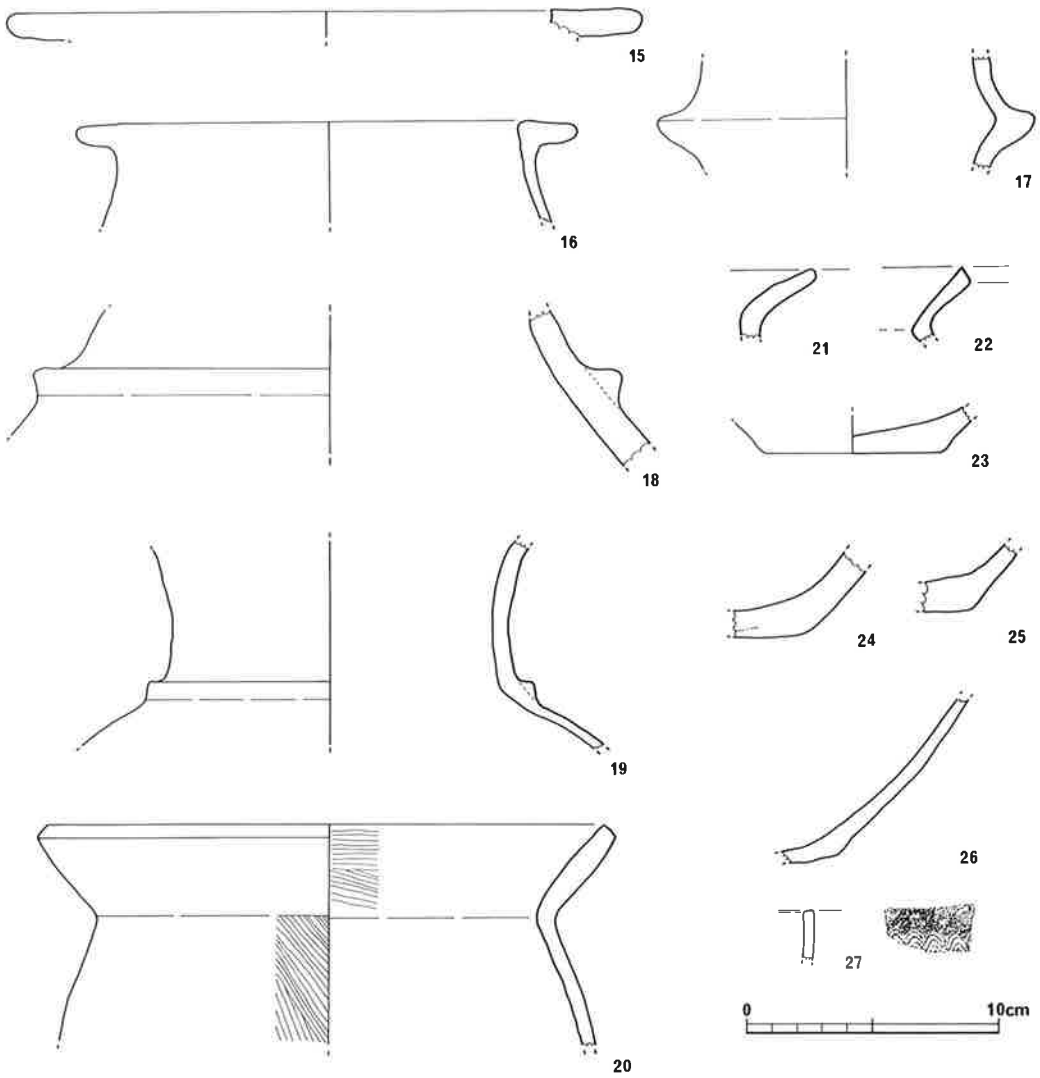


第10図　出土遺物（$\frac{2}{3}$）

石器では黒曜石製石核２点・剥片１点、安山岩製剥片２点があった。**15**・**16**は甕形土器の口縁部片である。**15**は口縁径15.6cmを測る弥生中期後半代の資料で、胎土に金雲母を含んでいる。**16**は弥生中期前半代の資料である。**17**は複合口縁壺で頸部から反転して、内側に傾きながら少し外方に反っている。わずかにハケ目仕上げ痕が残っており、焼成は良好である。金雲母・石英を含んでおり外来系の搬入品の可能性が強い。後期終末～古式土師器の時期である。**19**は朝顔形にひらく壺で、口縁端部を欠損しており、頸胴界に三角突帯を１条貼り付けている。部分的にハケ目が残っているが、磨滅が著しい。淡褐色を呈し、胎土には石英のほかに金雲母を含み焼成は良好である。**18**も壺形土器で頸胴界に、三角突帯を貼り付けている。胎土にやはり石英粒と金雲母を含み、焼成はやや甘い。どちらも時期的には弥生後期以降であろう。**20**～**22**は弥



第11図　出土遺物（$\frac{1}{3}$）



第12図　出土遺物（$\frac{1}{3}$）

生終末～古式土師器にかけての朝顔形に開く口縁で、甕形土器である。20は丸く張った胴部から口縁は直立気味に立ち上がっている。口縁端部は平坦で方形をなす。胎土に石英粒を含み焼成は良好である。外面は斜位のハケが施されている。21・22は端部が丸く茶色の粒と石英を含み淡褐色を呈する。22は上方につまみ上げ、端部を平坦に施している。淡黄褐色～淡褐色を呈する。23～26は底部片である。23は平底で、24～26は丸底になる底部付近の破片である。内面はナデ仕上げされている。27は須恵器口縁部片で外面に櫛描波状文を施している。口径約15cm程度の壺か碗になると思われる。

5．小　結

今回の田原積石塚の範囲確認調査は、近接する７世紀後半代の小嶋古墳群と何らかの関連が考えられたため、当初は積石塚の時期と規模を把握することに主眼点をおいて実施した。しかし、２基の積石塚とも石の組み方に何ら規則性が認められず、内部の遺構も検出にはいたらなかった。これは、竜尾川の氾濫による礫を積み上げただけのものと理解できる。しかし一方、24箇所の調査区では２箇所の地点において良好な弥生中期～古墳時代にかけての良好な遺物包含層および柱穴を検出することができた。特にＴ23の調査区においては最も遺物が残っていた。また、土層中には焼土も認められるため調査区を拡張したが住居跡の可能性もある。今回の範囲確認調査においては『田原積石塚』として報文しているが、これらのことを考えあわせると、今後は『田原遺跡』と名称を変更した方が良いように思われる。

6．寺ノ尾Ｃ遺跡調査の経過（第13図・第14図）

寺ノ尾Ｃ遺跡の範囲確認調査は、田原積石塚の調査を終了した後の平成元年12月11日～12月19日までのべ９日間で終了することができた。

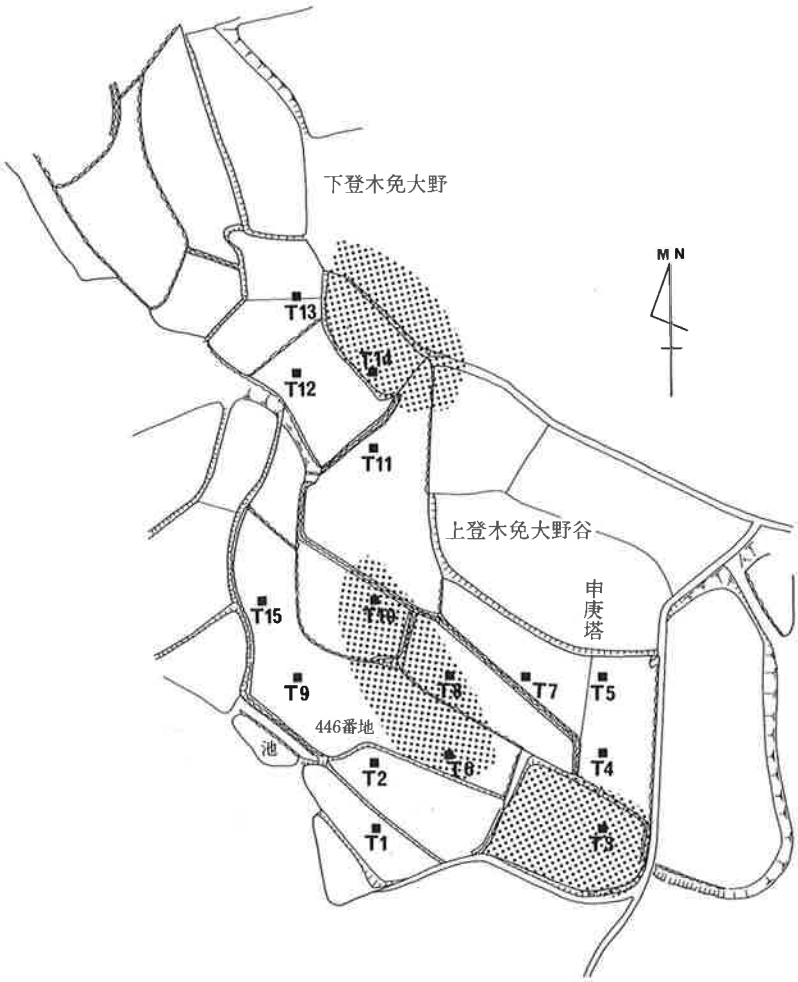
寺ノ尾Ｃ遺跡は、昭和62年刊行の『長崎県遺跡地図』から収録されているが、それ以前は収録されていなかった。今回の調査を行った地点は範囲の中でも最も北側の地点である。遺跡の中心は範囲内を横断する市道横久保・白岳線の道路両側の畑で、松浦高校郷土社会部によって採集された遺物にはナイフ形石器・台形石器・石槍・石鏃・掻器・細石核・弥生土器がある[注]。しかし、今回の現地踏査においては黒曜石製剝片等しか採集できなかった。この遺跡中心部と今回の調査地点との標高差は約14～20m 程ある。

調査は圃場整備予定地区を磁北にそって20m ×20m のメッシュに設定して行った。更に20m ×20m の調査区に２ｍ×２ｍのトレンチ15箇所を設定し、最終的に60㎡を発掘調査した。調査区の名称は設定した順にＴ１～Ｔ15を付して呼ぶ。その結果、４つの調査区（Ｔ３・６・10・14）において遺物包含層が確認され旧石器時代の石器、縄文時代の土器・石器・弥生時代の土器が出土した。しかし、出土量はさほど多くなかった。

今回の調査地点の西側の丘陵（圃場整備計画地域外）でも、黒曜石製石鏃・剝片、弥生土器等が採集されたため、地域周辺には遺跡が広範囲に分布している可能性が出てきた。しかし、遺跡の性格上同じなのかは今後の課題である。

注　久原巻二　「寺ノ尾遺跡について」　『松浦考古３号』　長崎県立松浦高等学校郷土社会部　1966

第13図　寺ノ尾Ｃ遺跡位置図（$\frac{1}{5,000}$）

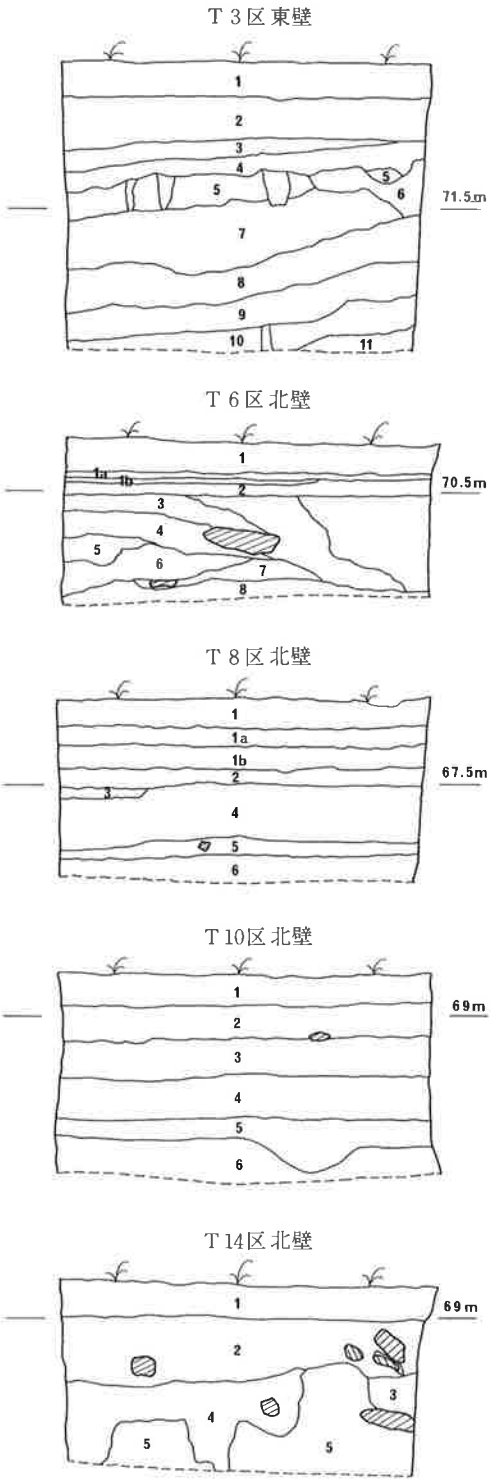


第14図　寺ノ尾Ｃ遺跡調査区設定図（$\frac{1}{2,000}$）

7．寺ノ尾Ｃ遺跡の土層および出土遺物

土層（第15図）

調査は15箇所を設定し、最も北側のＴ13区から最も南側に設定したＴ３区との標高差は約６ｍ程ある。遺跡は段々の棚田状に広がっており、土層の堆積状況にも相違が認められる。Ｔ１は表土の下にすぐ玄武岩風化礫の地山があり、包含層は検出できなかった。Ｔ２・４・５・９・13・15の調査区においては表土の下に埋土および攪乱層が検出でき、本来の包含層は検出できなかった。遺物も埋土・攪乱層からの出土であった。Ｔ３は最も深く1.5ｍほど掘り下げた調査区であり、ついに地山面までに達せず終了した。２層～４層は茶褐色粘質土で、２層は３層よりしまりがなく、４層はやや明るい気味である。この４層中より局部磨製石鏃１点が出土している。以下５層～11層においては遺物はなかった。５層は黄味を帯びた赤褐色粘質土で、ピット状の掘り込みがある。覆土は褐色土であった。６層はやや茶色気味帯びた暗褐色粘質土である。７層は明褐色粘質土、８層は黒褐色粘質土である。９層は淡褐色粘質土、10層は赤紫色粘質土で黒褐色粘質土のピット状の掘り込みが認められる。11層は赤紫色混礫風化土層である。２層～10層まではほとんど礫を含んでいなかった。Ｔ６調査区は表土下に水田床土があり、２層が明茶褐色粘質土である。３層は褐黄色、４層は褐色、５層は明褐黄色粘質土である。６層は明褐色粘質土でナイフ形石器２点・砕片１点が出土している。７層は褐色混砂礫層で、８層が淡黄褐色粘質土層であった。東側において２層下部から８層にかけて掘り込みが検出できたが、遺物の出土は



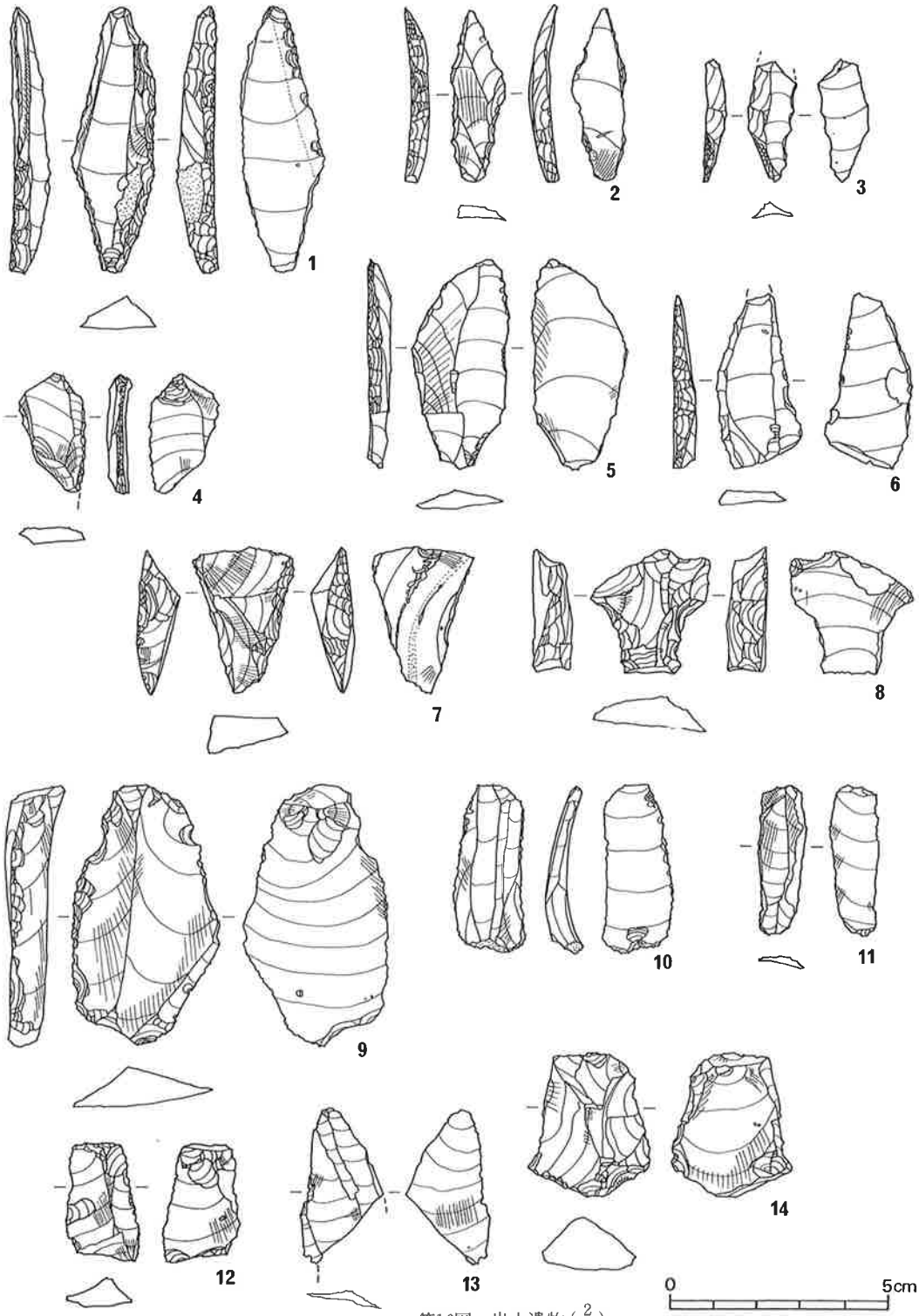
第15図　土層図（$\frac{1}{40}$）

なかった。褐色粘質土の下に暗褐色のやや茶色味を帯びた土層が堆積していた。Ｔ８調査区では１層表土および床土で、２層が灰茶褐色粘質土で全体に黒い班点が分布している。３層は灰黒褐色粘質土で、近世陶磁器・弥生土器を含んでいた。５層は黒褐色粘質土で、６層は灰黄色混礫層で、玄武岩風化礫層と思われる。Ｔ10調査区は１層表土、２層濁黄茶褐色粘質土、３層濁茶褐色粘質土で濁黄褐色土が沈殿している。４層は暗茶褐色粘質土で、遺物が24点出土している。胎土に滑石を混入している縄文中期土器片・石鏃・石核・弥生土器があった。５層は黒褐色粘質土で黒色班点を含んでいる。上面は濁黄色を呈している。５層中より弥生土器とともに台形石器が出土している。６層は濁茶褐色混礫層である。礫は赤く変色しているものがほとんどであった。Ｔ14は北側に設定した調査区であり、畑地として利用されている。１層表土、２層は褐色粘質土でしまっている。上面には黒色班点粒を含んでいる。３層は濁黄褐色粘質土、４層は淡黄灰色粘質土、５層が濁黄褐色礫層で玄武岩風化土層でもある。遺物は37点が出土している。２層から台形石器、３層から剝片、４層はナイフ形石器が出土している。

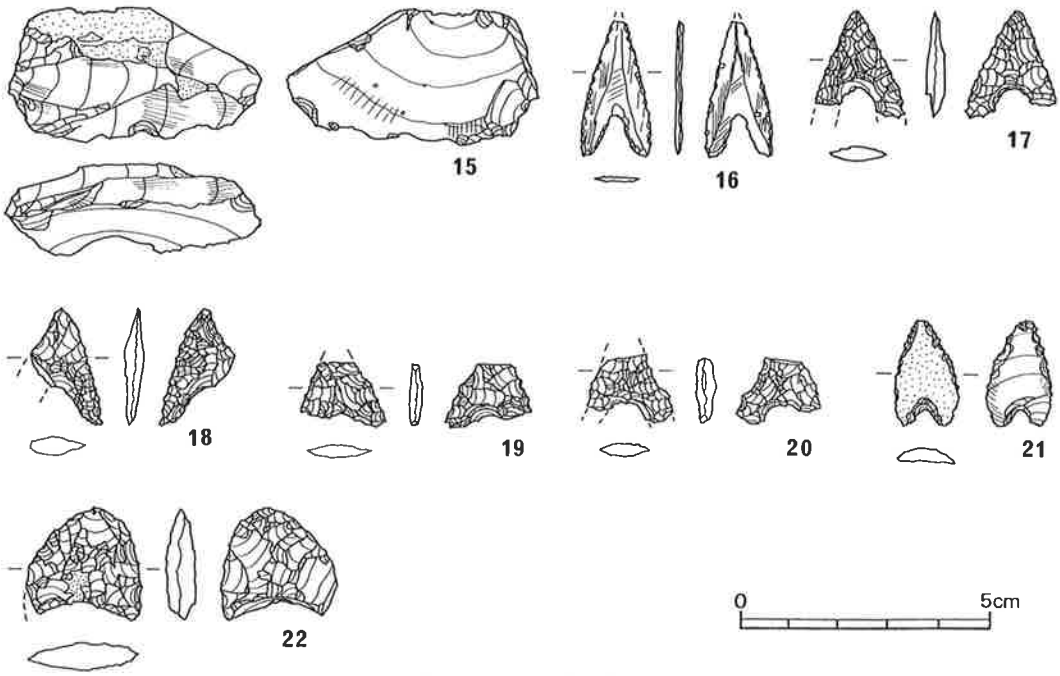
出土遺物（給16図・第17図）

今回の寺ノ尾Ｃ遺跡の調査において出土した遺物は346点であった。そのうち実測可能な22点を図示した。あとの２点は西側畑地の表面採集品である。出土した遺物の中で約56％は表土および埋土・攪乱層からの出土であった。量的には旧石器の資料が多く、ついで弥生土器であった。旧石器の資料はＴ６・14区から、弥生土器の資料はＴ10区からとややまとまる傾向を示している。

1～**6**はナイフ形石器である。**1**は器長６㎝もある大型のナイフ形石器である。ブランティング加工は丁寧に背面より施している。断面三角形を呈し、刃部には使用痕が認められる。基部調整は認められず正面に自然面を有する。幅1.9㎝、厚さ0.9㎝、重量8.8g で、Ｔ15区攪乱層出土。**2**～**4**は比較的薄手の縦長剝片を利用している資料である。**2**は両側縁に入念なブランティング加工を行っている。刃部に使用痕あり。Ｔ11-2層出土である。**3**は小形で細長の縦長剝片を素材とし、その基部に微細なブランティング加工を集中して行っている。Ｔ14-4層出土である。**4**は先端部・基部を欠損しており、Ｔ５区攪乱層出土である。**5**・**6**は片側縁部にのみブランティング加工を施している資料である。他に比べて器長および幅が大きい。**5**は器長4.7㎝、幅2.2㎝ある。いずれもＴ６-4層出土である。ナイフ形石器と同じ範疇に考えられている台形石器は１点あった。**7**は大型の横長剝片を利用し形状が三角のもので、刃部が若干湾曲している。ブランティング加工は両側縁に施され直線状を呈している。長さ3.3㎝、幅2.3㎝、厚さ１㎝、重量4.85g である。**8**は縦長剝片の打面を切断して基部に利用し、両側縁の基部周辺に抉入状のブランティング加工を左右対称的に背面より施している。先端部から胴部を欠損しており剝片尖頭器と思われる。Ｔ14-2層出土である。**9**は縦長剝片を利用した両側縁部に使用痕がある剝片である。器長5.9㎝、幅3.4㎝、厚さ1.2㎝を測る。**10**も使用痕のある剝片であ



第16図　出土遺物（$\frac{2}{3}$）



第17図　出土遺物（$\frac{2}{3}$）

る。全面パティナが著しい。**11**～**13**は剝片である。いずれもナイフ形石器の素材には十分適している。**10**・**12**はＴ14-2層、**11**・**14**はＴ14-3層、**13**はＴ６-4層出である。**14**は多打面をもつ不定形の石核から剝離された極めて厚手の剝片でＴ14-3層出土である。**15**は石核である。縦長剝片を剝離している。Ｔ10-5層出土。**16**～**22**は石鏃である。**16**は縄文早期に顕著な局部磨製石鏃である。先端部を欠損しており、細身である。両面とも丹念に研磨が施されている。断面は薄く精巧に仕上げている。先端角度は35°あり鋭利に尖っている。器長2.7cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、基部の抉りの深さ0.8cmある。Ｔ３-4層出土である。**17**は両脚部を欠損しているが形状的には鍬形鏃の範囲に入ると思われる。先端角度55°を測る。Ｔ１表土出土。**18**は脚部が尖っており、先端角度50°を測る。Ｔ９埋土出土である。**19**・**20**は調査地区西側の畑地から採集した石鏃である。先端部・脚部を欠損している。**21**は寸づまりの縦長剝片を利用した剝片鏃である。表面は自然面に覆われており、簡単な加工を施している。Ｔ11-4層出土である。**22**は大型の石鏃で脚部を欠損している資料である。側縁部は曲線を描き外湾している。Ｔ11-2層である。石材利用では**6**の灰青色黒曜石を除くすべてが黒色黒曜石である。

以上のほかに図示できなかったが、Ｔ10-4層より胎土に滑石粉を混入している縄文中期阿高系の土器片が１点ある。また、同じくＴ10-4層～５層出土の弥生土器もあるが細片のため図示できなかった。その他の調査区出土の弥生土器は44点あるがいずれも細片であり報告のみにとどめておく。

8．小　結

今回の寺ノ尾C遺跡の範囲確認調査では、遺跡全体の面積から考えると極めて部分的調査に過ぎなかった。そのため今回の調査で得られた資料から遺跡の全容を明らかにすることは不可能である。したがって、中間報告的な意味と理解していただければと考えている。

本遺跡からはいずれも少量ではあったが、4箇所の調査区から遺物包含層が検出された。それも旧石器時代のナイフ形石器を主体とする時期から、縄文時代早期・中期・弥生時代（時期不明）まで幅広い遺物が検出できた。しかし、縄文早期・中期・弥生時代では若干の石器と磨滅が著しい土器破片が少量であったため、生活面の立証まではできなかった。今後の調査次第では、重要な発見があるかも知れないことを記載しておく。

そこでここでは最も古く位置づけられる旧石器時代の石器群について考えてみたい。

本石器群は、ナイフ形石器では背面に平坦細調整を施さない二側縁加工のナイフ形石器B類[注1]と片側縁のみにブランティング加工を行っているナイフ形石器、基部に微細なブランティング加工を集中するナイフ形石器がある。台形石器では三角形を呈し、両側縁にブランティング加工が施されているが、平坦調整は行われていない資料がある。また、先端部を欠損しているが縦長剥片を素材に、基部の両側縁に抉入状の加工を施している剥片尖頭器1点がある。比較的まとまって出土したのがT14調査区で、2層より剥片尖頭器と縦長剥片で使用痕のある剥片、3層より縦長剥片と幅広剥片、4層より極めて稀な形態であるナイフ形石器が出土している。素材生産技術については、黒曜石の石核が未検出なため不明確な部分が多いが、縦長剥片生産技術とナイフ形石器が存在するため、フェイズⅡ後期[注2]以後に位置付けられるのは確実であり、この調査区はナイフ形石器文化の終末的段階と考えられる。一方片側縁加工のナイフ形石器は、いずれもD類に属し、堤西牟田遺跡第1文化層に類似しているようだが、断定は避けておく。台形石器は、加工技術によって、ブランティング加工のみの「百花台系統」と平坦調整の顕著な「枝去木系統」という2つの系統に分類している。前者はウワダイラ型・日ノ岳型を経て、百花台型となる変遷を、後者は部分的平坦細調整→原の辻型→枝去木型という変遷を考えている。この点寺ノ尾C遺跡の台形石器は器形の加工状況から日ノ岳型の範疇に入ると考えられフェイズⅡ中期に属すると思われる。

本遺跡の性格づけについては、調査が部分的なため新たな資料の検出により変更すべき点があるかも知れないが、今後の調査次第では、編年研究に大きく寄与すると考えられ、本地区は貴要な遺跡であることには変わらない。

注1　萩原博文　「西南日本における旧石器時代石器群の様相」　『考古学研究109」　1980
　　ナイフ形石器の分類はこの論文を参照した。

注2　萩原博文・下川達彌　「西九州における旧石器時代石器群の編年（上）・（下）」
　　『古代文化　35-6、35-9』　1983

Ⅲ　ま　と　め

田原積石塚・寺ノ尾Ｃ遺跡の範囲確認調査は竜尾川地区県営圃場整備事業とのからみで、遺跡の範囲確認として、圃場整備事業と埋蔵文化財との調整を図るため、その基礎資料を収集するために行ったものである。田原積石塚では２基の積石塚とも自然の礫を不規則に積み上げただけのもので、一般的にいう古墳時代の積石塚とは確認できなかった。しかし、２箇所の調査区において弥生時代～古墳時代の遺物包含層および柱穴を検出した。この点については今後圃場整備事業との関係で計画の修正が必要であろう。また、寺ノ尾Ｃ遺跡では４箇所の調査区において、旧石器時代から弥生時代にかけての遺物包含層が確認できた。幸いにも深いところで包含層を検出することができたが、この遺跡も圃場整備計画の修正が求められるようだ。

図　版　写　真

田原積石塚遠景（東より）

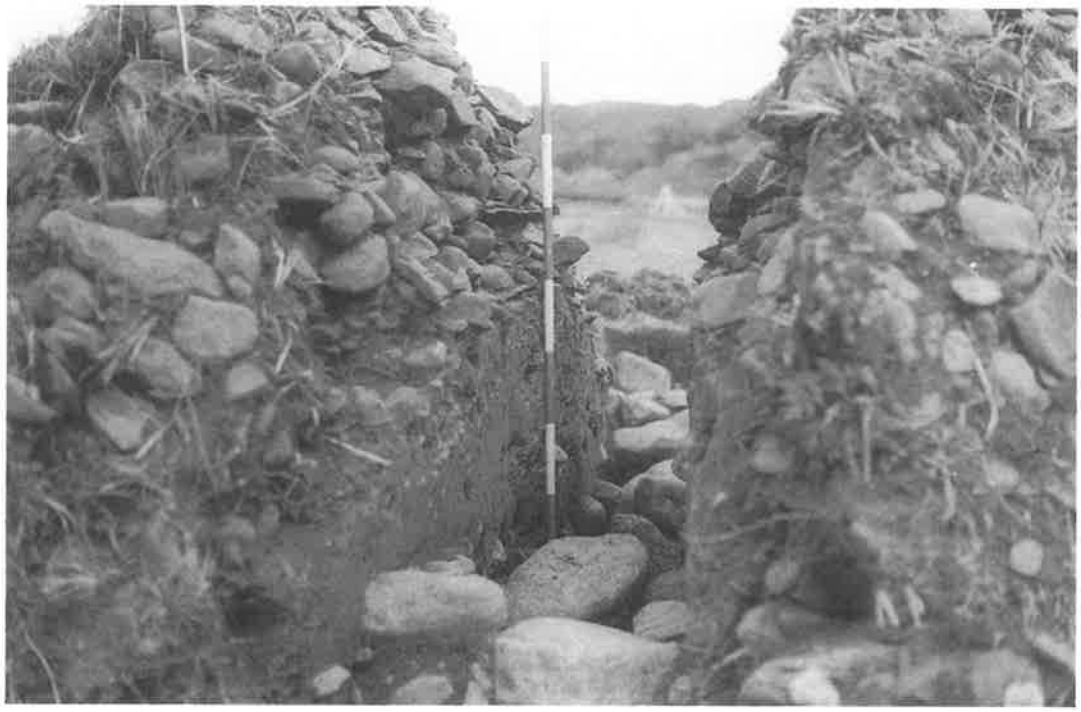
田原積石塚調査風景

図版 2

1 号積石塚近景（西より）

1 号積石塚南壁断面（西より）

2号積石塚近景（東より）



2号積石塚西壁断面（東南より）

図版 4

T 5区 北壁土層

T 10区 北壁土層

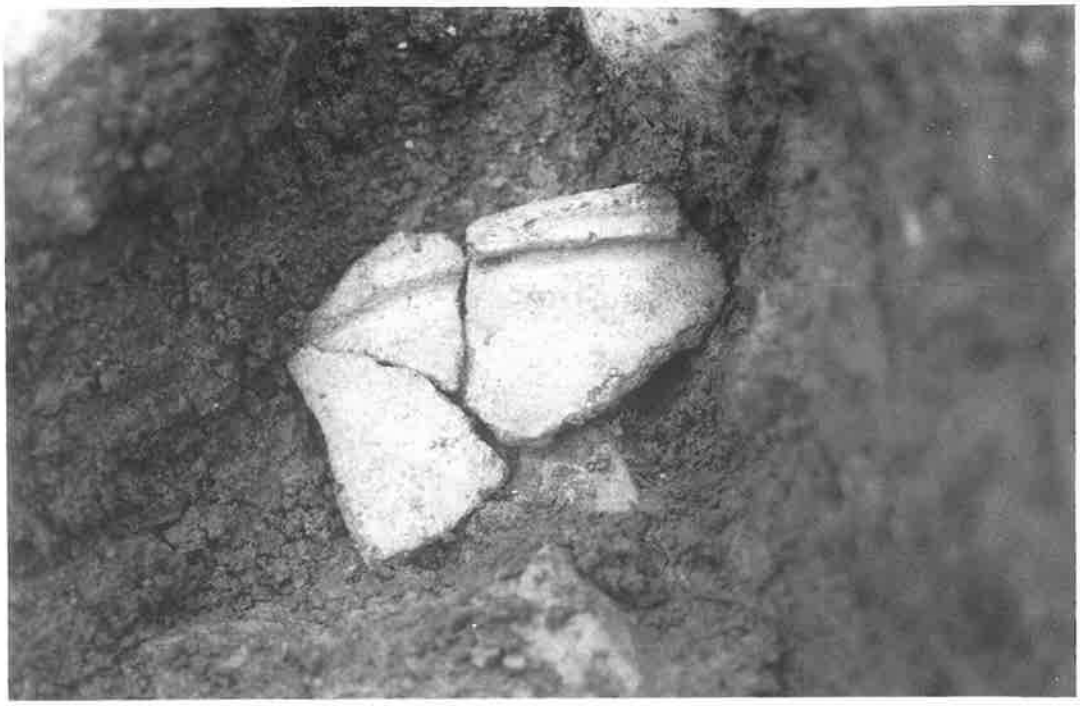
T 24区 北壁土層

T 24区 ピット検出状況

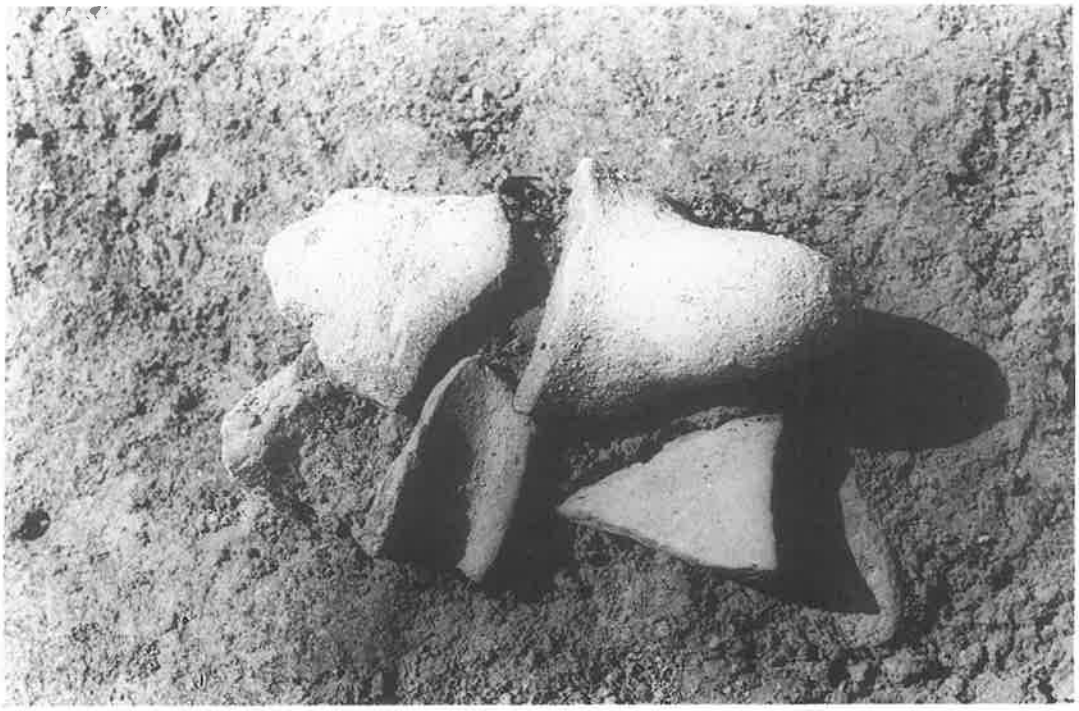
図版 6

T 23区 東壁土層

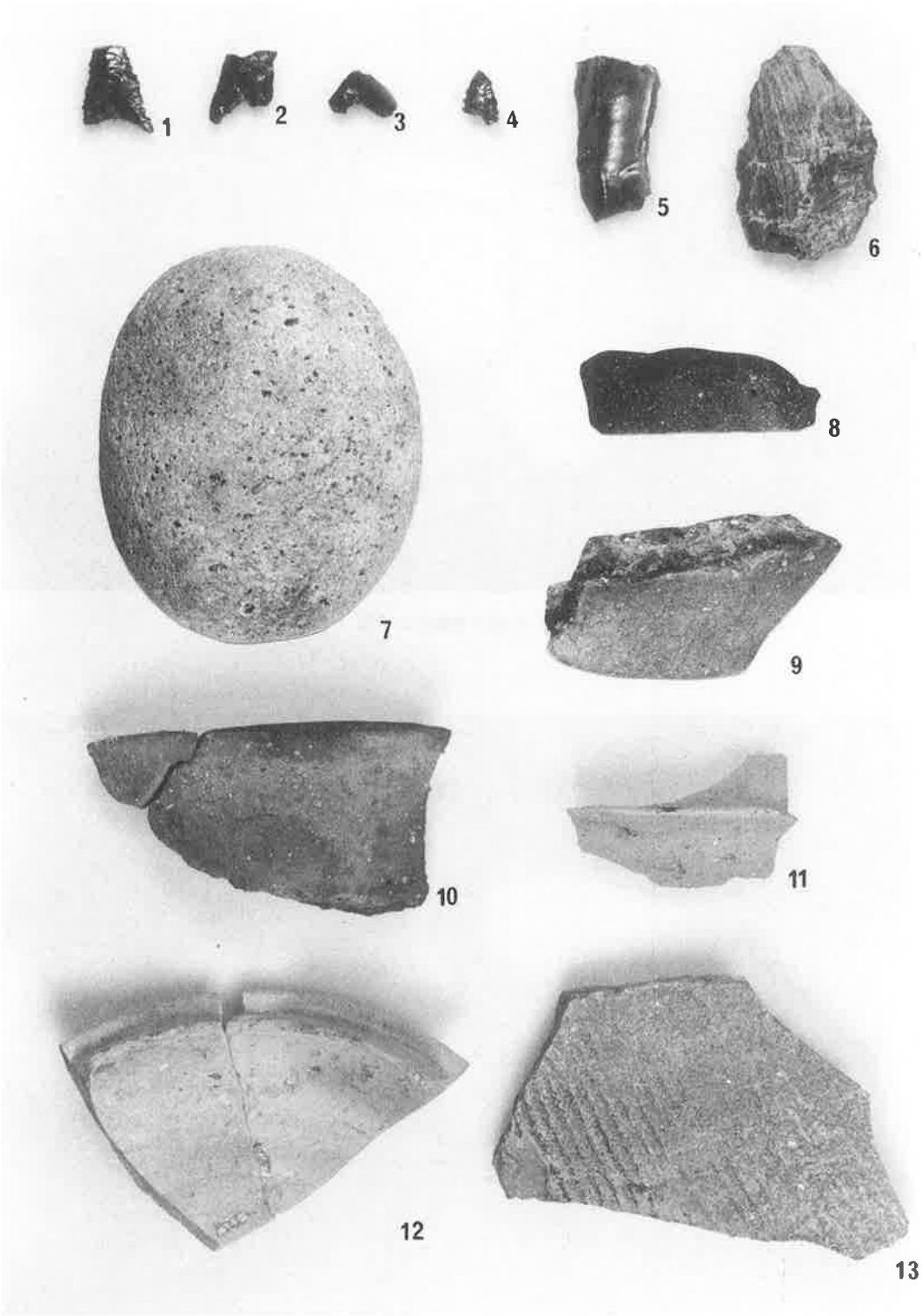
T 23区 遺物出土状況（北より）



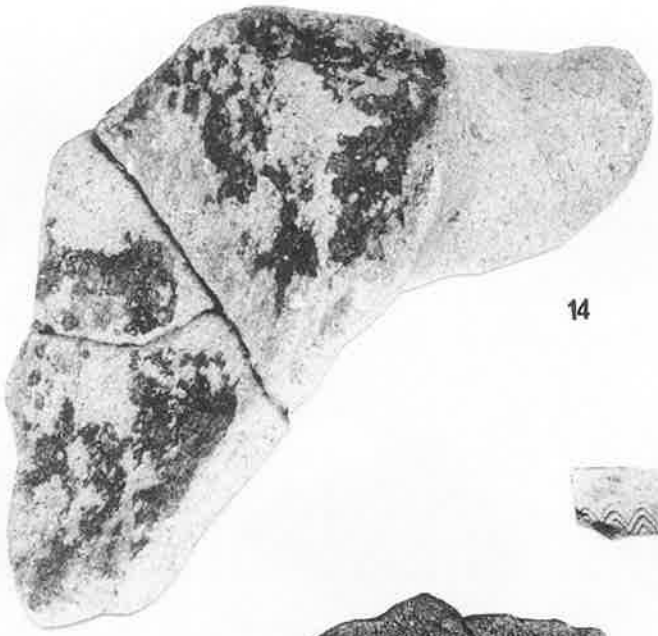
T 23区 遺物出土状況

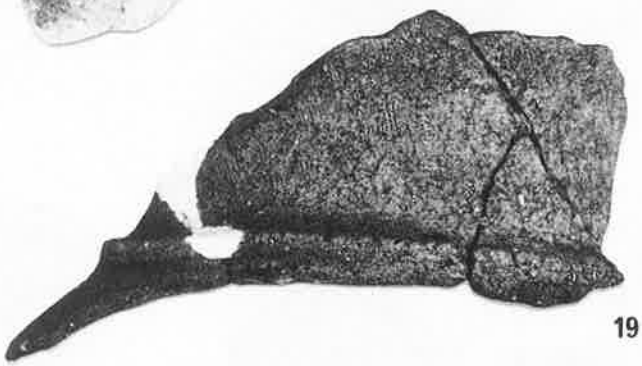


T 5 区 遺物出土状況

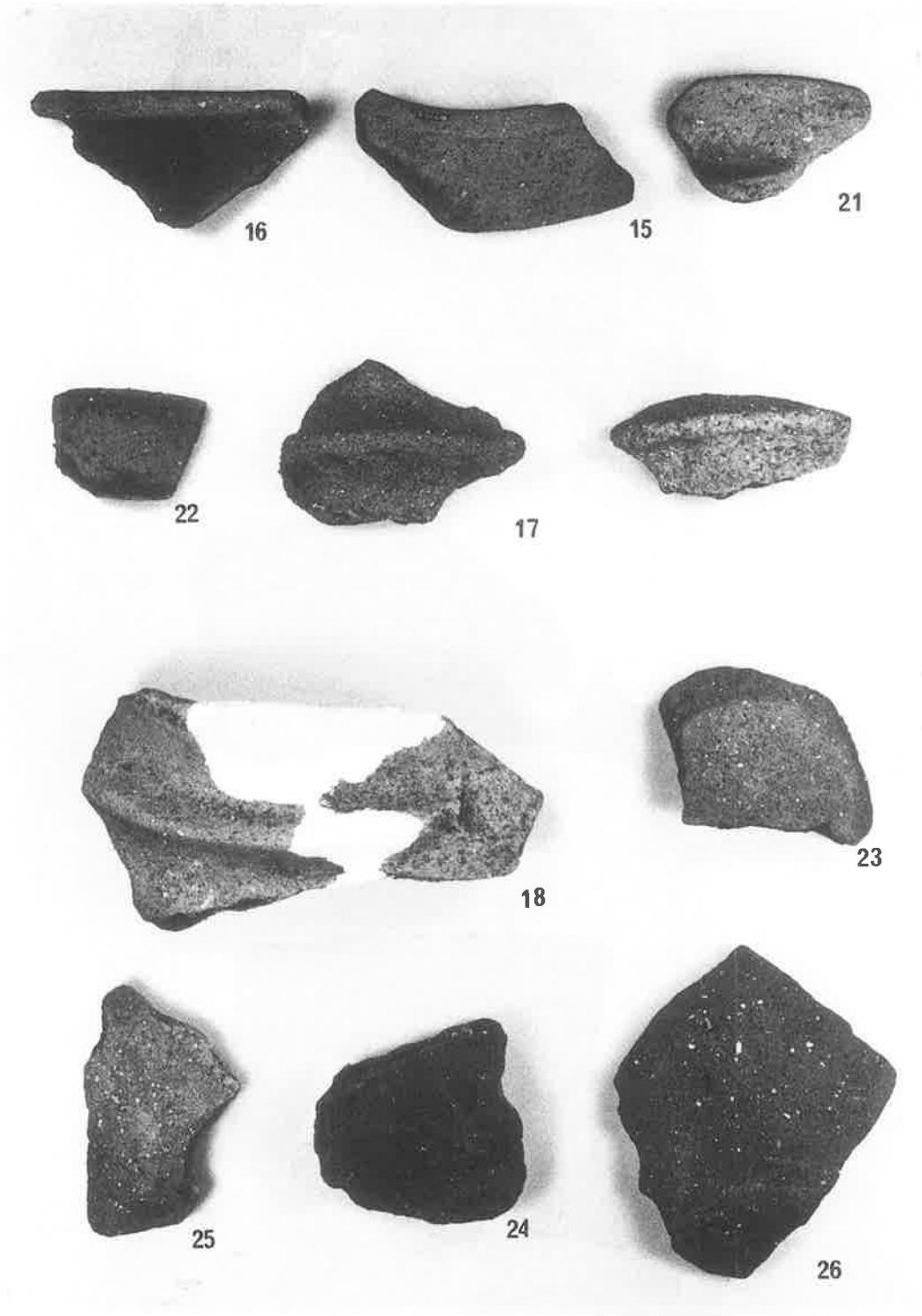


出土遺物（$\frac{1}{2}$）





出土遺物（$\frac{1}{2}$）



出土遺物（$\frac{1}{2}$）

寺ノ尾C遺跡遠景（北より）

寺ノ尾C遺跡調査風景

T 3 区 東壁土層

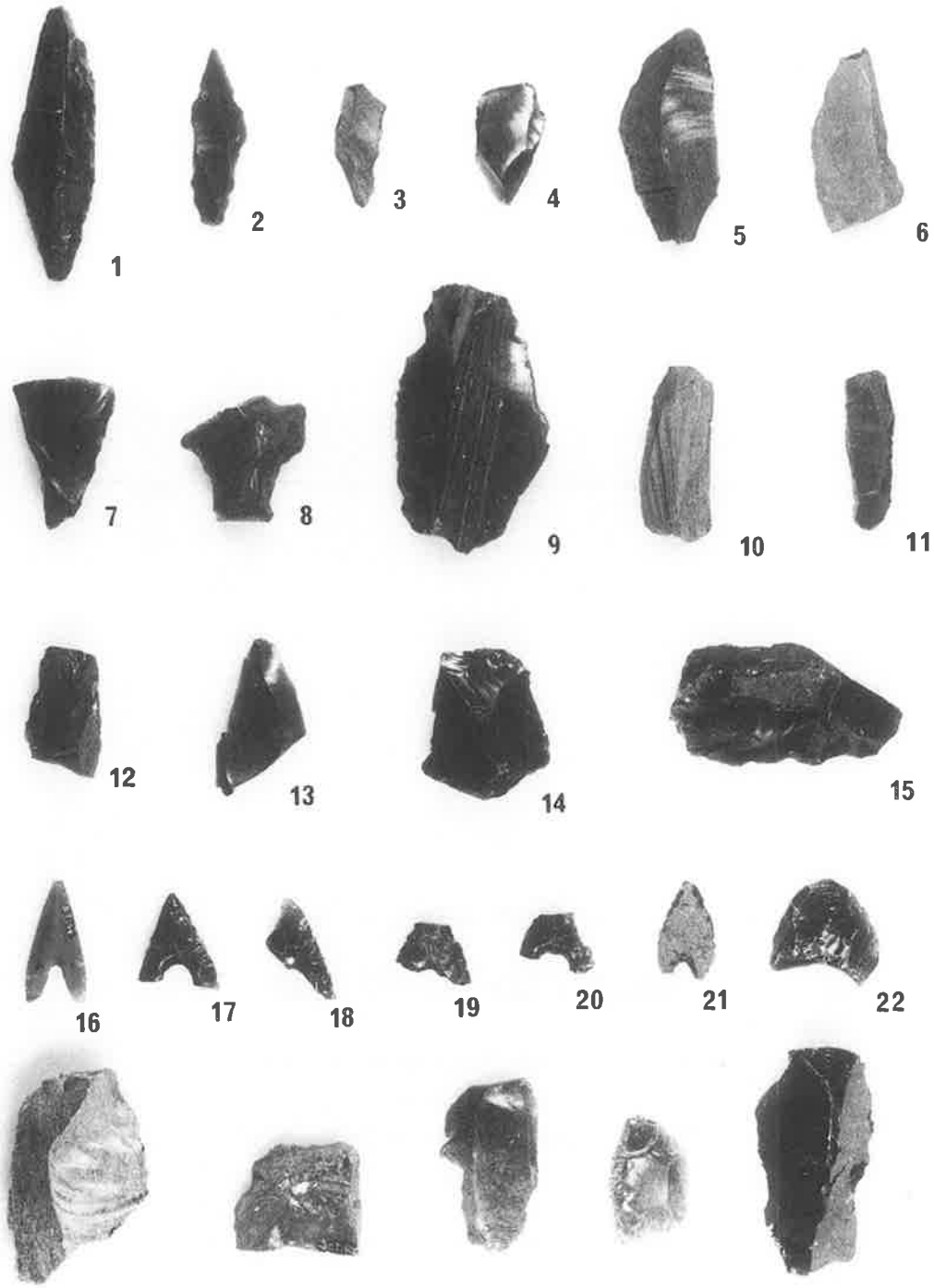
T 8 区 北壁土層

T 10区 北壁土層

T 14区 北壁土層

T 6 区 遺物出土状況

T•10 区 遺物出土状況



出土遺物（$\frac{2}{3}$）

松浦市文化財調査報告書 第７集

田原積石塚・寺ノ尾Ｃ遺跡

発　行　　長崎県松浦市志佐町里免365番地
松浦市教育委員会

印　刷　　長崎県佐世保市山祇町１９－１３
Ｓ　Ｋ　印　刷